

『「この町に住んでいてよかった」 そう思える地域を介護の現場から』

鈴木ヘルスケアサービス株式会社 取締役社長 すずき のりしげ 鈴木 則成 氏

インタビュー企画第8弾。今回は、介護・福祉の分野で幅広くご活躍されている、彦根愛知犬上介護保険事業者協議会会長 鈴木則成さんにお話をうかがいました。【取材時 平成30年7月25日（水）】

*インタビューは、彦根医療福祉推進センター所長 日村好宏 氏（彦根市立病院院長代理・彦根市福祉保健部理事）です。



鈴木則成（すずきのりしげ）氏

鈴木ヘルスケアサービス株式会社取締役社長
鍼灸師・介護支援専門員
一社)彦根愛知犬上介護保険事業者協議会
会長（代表理事）
滋賀県介護支援専門員連絡協議会会長

鈴木ヘルスケアサービス株式会社オフィスにて

鍼灸治療から介護の分野へ

日村氏：鈴木さんが、介護の事業をはじめられたきっかけはどういったことでしたか。

鈴木氏：もともとうちの家業は鍼灸の治療院、東洋医学の治療院をしていましたので、私もその道を目指すようになり、京都の鍼灸を学ぶ大学に進学し、鍼灸師になりました。大学卒業後、しばらく神戸で鍼灸の修行とカイロプラクティックの勉強をしてから彦根に戻り、父と二人で鍼灸治療をしていました。

そんな中、なかなか外に出られない患者さんがおられたので、私が往診を始めることにしました。往診では、虚弱で外出が難しいという患者さんもおられましたが、脳血管障害で半身麻痺になられた方が多くおられました。

介護保険制度のはじまりとともに

ちょうど私が往診を始めた頃は、3年後に介護保険制度が始まるぞという時期でした。また、介護保険制度に関係する介護支援専門員（以下、「ケアマネジャー」）については、鍼灸師が受験可能な資格となりましたので、それならば資格を取ってみようと思い受験をして、ケアマネジャーの資格を取りました。そして、ケアマネジャーとして、往診をしていた脳血管障害の患者さんなどに、鍼灸治療についても支援の中に入れていくのかなと思いながら介護保険制度の勉強をしていくようになったのです。



『介護サービスが足りない！』

いざ「介護保険が始まるぞ！」といった時に、彦根市には介護の事業所が非常に少ない状況でした。

それで、当時の彦根市の介護保険の担当者は、もっと民間に介護事業に参入してほしいということで熱心に勉強会を開催されており、私もそこでいろいろと学んでいくうちに、サービスが足りない現状を実感していきました。

特に彦根市にはデイサービスが足りませんでした。今でこそ非常にたくさんありますが、介護保険制度がスタートする2000年当時は、5か所しかありませんでした。

ですから、『お風呂に入りたい』、『デイサービスに行きたい』というニーズに沿ってケアプランを作っても、当時は利用までに3ヶ月待ち、6ヶ月待ちといった状態で、なかなかお風呂に入れませんでした。



鈴木ヘルスケアサービス株式会社本社。
かわいい鈴のマークが目印です。



『足りないんだったら、自分でやっつけていこう！』



往診でみていた患者さんの中には、ヘルパーさんやデイサービスを利用している方もおられました。本当はもっとサービスを利用したい、お風呂ももっと入りたい、といった要望をもっておられました。

それで、何かその要望に対して、お手伝いできることや、民間だからこそできることがあるのではないかと思ったことが介護保険の事業に参入する最初のきっかけになる出来事だったのかなと思います。

日村氏： そういう時代があって、社会の必要性に応じて介護事業ということに鈴木さんが取り組まれたということですね。今はどのような介護事業をされていますか。

鈴木氏： 最初始めたのは、居宅介護支援事業所（ケアプランの作成）、訪問介護サービス、訪問入浴の3つでしたが、その後、デイサービスが足りないということでデイサービス事業にも参入させていただきました。

当時は、民間で実施しているデイサービスがなくて、私も自前で建てる財力もなかったもので、建物は賃貸で民設民営といったやり方でスタートしました。

現在は、居宅介護支援事業所2ヶ所、訪問介護1ヶ所、デイサービス4ヶ所、グループホーム1ヶ所、小規模多機能型居宅介護事業所1ヶ所と、彦根市地域包括支援センター1ヶ所（彦根市の受託事業）、そして彦根市、甲良町、多賀町から筋力向上トレーニング事業、認知症予防事業などの地域支援事業といったサービス提供をしています。

介護の仕事のやりがいとは

日村氏： この仕事をやっていて良かったなということは、こういったところに感じますか。

鈴木氏： 私は、仕事を通じて、『地域づくり、まちづくり』といったことをしたいという思いがあって、この介護を通してこの彦根の地域が変わっていくのが楽しいなあと感じられることでしょうか。

実際はまだまだだと思いますが、私たちが在宅でやっているサービスが充実していくことで、『施設に入所しなくても自分の家で最後まで過ごせるようになったらいいよね』ということが、最初の頃からの思いだったので、要介護状態になって重度になってしまったら施設に入所するというのではなく、終の棲家として自分が住み慣れたところで、最後まで生活できるような支援がしたいなと思っています。今は医療依存度の高い人も多くなってきましたので、在宅の看取りができるように、というところまでつなげられるとよいのですが……。そんな住みやすい地域になっていくといいなと思っています。



認知症について

日村氏： 認知症患者はこれからますます増えていくことが予想されていますね。

鈴木氏： 介護保険サービスを始めてびっくりしたのが、認知症の症状のある方がたくさん利用を希望されたことです。脳血管障害の方の利用が多いのではないかと考えていたのですが、デイサービスを始めた頃、6～7割が認知症の方という状況でしたので、こんなに多くの認知症の方が地域におられることに驚きを感じました。もしかしたら、これまで認知症であることをあまり表に出さず、家族で一生懸命お世話をされておられたのではないかと思います。しかし、認知症の方を家族だけで支えるのは大変です。それで、デイサービスができてきて、利用できるということで、利用希望が増えていったのだと思います。そのようなことがあって、認知症の方のお世話ししていける場の必要性を強く感じ、デイサービスを増やしていきました。

本人の願いをかなえるために

日村氏： これまでのご経験の中で印象的な出来事はたくさんあると思うのですが、この仕事をやっていて良かったなと感じられた経験がありましたらお聞かせください。

鈴木氏： そうですね。やはり、本人の願いをかなえることができた時ですかね。施設に入所しないといけなかなあと思っていた人が、介護サービスを利用することによって、家で長いあいだ過ごすことができ、最終的には病院に入院されたのですが、本人の“家にいたい”という願いをかなえてあげることができて、そして、家族さんたちも、家でみていけるかどうか思い悩みながらも、家で本人に関わってあげることができたという満足感を感じてもらえた時には、良かったなあと思いましたね。きっと介護保険サービスがなかったらすぐに施設という選択になったのだろうと思います。やはり支援があったからこそ、本人の願いに添うことができて、そういうときは嬉しく思います。

これからの介護について

日村氏： これからますます医療や介護の支援が必要な方が増えてますが、介護の分野でまだ足りないと思うところや、逆にずいぶん良くなってきているところをあげるとすれば、どんなことでしょうか。



鈴木氏： 良いことと言えば、サービス量が増えて、介護サービスは使いやすくなって、介護サービスの認知度も高くなったと思います。そういう部分では介護サービスを気軽に使っていただいで支援できるようになり、家族さんも楽になっているのかなと思いますね。

課題ということでは、サービスというよりも、介護職の介護人材の不足ですね。人が足りないですね、ほんとに。介護施設を作っても介護する人が集まらないので入所者を受け入れできないといった事態が起っています。

日村氏： これは全国的な問題ですね。介護にかかわる方の離職率や人員不足はかなり深刻なのですが、何が原因なのでしょう。賃金や手当てなのか、やりがいなのか、行政の力が必要なのか、何か感じておられることがありましたら教えてください。

鈴木氏： 一番はイメージなのではないかと思います。やっぱり介護は暗いイメージがあるのでしょうか。

テレビドラマでも、急性期のところ、例えば救命救急などはドラマティックに恰好よく描かれますが、慢性期のドラマはあまりないですね。その中で介護というと、マスコミ報道では、賃金が安い、重労働、そういうところが前面に出てきてしまっていて、なんとかしなくてはいけないと言えば言うほど、しんどい仕事なのかなというイメージがついてしまってきているように思います。

しかし現実には、介護の仕事というのは“やりがい”があって、やっている人たちは、すごく楽しんで仕事をしていると思うのです。

「ひとを輝かせる」介護職

日村氏： 具体的には、どういった時にやりがいを感じているのでしょうか。

鈴木氏： やはり、『自立支援』になるのかなと思います。

「介護」というのは、本当はしたいことがあるけれども病を抱えて介護が必要になってできない状況になっている方を、支援をすることによって、その人の『やりたいことをできるお手伝いをするができる仕事』なんです。

介護の仕事というと、なんとなく後始末的なイメージが強いのですが、本当は『高齢者の方を輝かせる仕事、関わり方で利用者さんの自己実現ができるようにする仕事』が介護職なのだと思います。

日村氏： そうですね。介護の方の支援があることによって、人とかわり、楽しみや生きがいを得て、前を向くことができる。それが健康寿命に繋がるといったことにもなるのだと思います。そういったことに携わるというのは大きなやりがいだと思うのですが、このようなプラスイメージをどういうふうに発信するとよいのでしょうか。

鈴木氏： 国でもイメージ戦略として、介護のそういったすばらしい面をPRしていきましょうと言われていますが、まだまだこれからといった状況ですね。ですから、今、表に出てくるのは、給料が安いとか人手



不足とか重労働といったことばかりになってしまっていて、イメージを変えていくのは時間がかかるのではないかなと思います。もっともっと「介護職は素晴らしい仕事なんだ」ということを発信していきたいと思います。

『 Face to Face』 人とつながる 多職種連携

日村氏： これから超高齢化社会になって、介護と医療が両方必要な方が増えて、生き方も多様になってきます。そういった中では、いろいろな職種の方が関わって支援していかなければならない状況になりますが、多職種の連携ということにおいて、心がけておられることや工夫されておられることはありますか。

鈴木氏： 医療との連携は大切だと思います。大事なのは、「顔と顔・Face to Face」。まず「知り合う」ところが必要ですね。まず自分を知っていただく、それが無いと連携はできないと思っていますので、顔を覚えてもらえるように心がけています。介護やケアマネジャーにはとても大切なことだと思います。

この湖東圏域では、多職種連携の推進に向けた様々な取り組みが行われていますが、連携の現状としては、まだまだ進んでいないかと思っています。やはりお互いが歩み寄りということが必要で、一方が一生懸命でも、相手がそうではないと難しいので、まだまだこれからだなと思っています。

夢 「ここに住んでいて良かったな」と思っていただけのように

日村氏： では、最後に、これからの鈴木さんの夢をお聞かせください。

鈴木氏： 夢は、先ほどもお話ししましたように、「ここに住んでいて良かったなと思えるまち」、終の棲家で、住み慣れたところで、最後まで生活できるようになったらいいなと思ってもらえるような地域づくり、介護、支援ができたらいいなと思っています。住民さんが「ここに住んでいてよかったな、彦根に住んでいてよかったな」と思っていただけのようなことをどんどんしていきたいなと思っています。



日村氏： これからも誰もが安心して暮らせる地域づくりに向けてどうぞよろしくお願いいたします。

【編集後記】 「介護は人を輝かせる仕事」…。鈴木さんからお聞きしたこの言葉はとても印象的でした。その他にも、普段はなかなか聞くことがなかった鈴木社長の熱い思いに触れ、度々驚き、感動し、もっといろんなエピソードが聞きたいなと思いました。これからも、どうかそのパワーで介護の現場を盛り立ててください。よろしくお願いいたします。…でも、くれぐれもお体には気をつけてくださいね(A (^ω^))。